

[インタビュー]

孫京淑 地震後の神戸での被災生活と、韓国へ避難のため帰国した
李素● 時の気持ちを素直に語っていただきました。
お二人とも神戸大学大学院文学研究科の2年生。
韓国ソウル出身。

——地震が起きたとき、お二人はどこにいたんですか。

(二人)下宿にいました。

(ソ)私は王土平町で、けっこう学校に近くて、歩いて10分くらいかな。わりと上の方ですね。阪急六甲よりも上ですから。周りはあまり被害が無かったんですけど、うちだけ被害があって。

——えっ、そうなんですか！

(ソ)古い下宿だから、ハハハッ。周りは高級住宅地という感じでわりと新しい家ばかりなんですね。古い家はあんまり無いんですけど、たまたま見かけると、つぶれたり、瓦が落ちたりしてました。

——今はどうしてるんですか。

(ソン)そのまま住んでますけど、今新しい所を探してます。

——半壊状態くらいにはなったんですか。

(ソン)そうです。半壊状態です。でも、他の所は家賃が高くて出ていけないんです。もう木造住宅には入りたくないし...それだと、今とあまり変わらない状態でしょう？

——でも今の所に住めるんですか。半壊状態で。

(ソン)とりあえずは。外側はヒビが入ったり、壁が落ちたりしてますけど。

——家賃はどうなってるんですか。

(ソン)そのまま払ってます。地震後、半月ほど韓国に帰ってたんですけど、その時水も出なかったし、ガスも出なかったんですけど、それでも払ったんですよ。

(リ) うちの所は大家さんが良心的で、2月分は払わなくてもいいと言われたんです。

(ソ)そういうところ多かったのに、うちはだめだったんです。出たかったら出てもいいよ、という感じですね」

——りさんの家はどこなんですか。

(リ) 私は王子公園とJR灘の中間です。

——そこもひどかったですか。

(リ) 周りは、向かい合った家どうし崩れたりしてますけど、うちだけポツンと大丈夫なんですよ。奇跡だと思います。

います。

——新しいの？

(リ) いえもうボロボロなんですけど。南北に長いからよかった、とかいう話もありますけど、理由は分からないです。外部的に見ると、壁が落ちてたり、ちょっとヒビが入ってたりして、半壊なんですけど、内部は大丈夫です。

——地震が起きたときはどんなふうに感じましたか。

(ソ) 私はドーンという音が聞こえて起きたんですけど、もう立ち上がれない状態でした。これ地震かな、とにかく何かが起きたんだと思って逃げようとしたんですけど、立ってられないんです、自分の意志では。本が落ちてきて、机の上のスタンドが落ちて、何かが割れる音がしました。結局、布団をかぶって、本の下敷きになった状態で、そのうち揺れがおさまったんです。逃げようと思って見たら、既に玄関は開けっ放しでした。

——えっ、玄関開いてたの？

(ソ) 自然にポーンと開いちゃったんです。それから玄関まずっと閉まらない状態で、やっと先週直してもらったんです。裏口で出入りしてました。

それから外に出たんですけど、周りがなんともないので、私一人どうしようって慌ててしまいました。隣に同じ学部の先輩が住んでいたので、ドンドン、ドアをたたいて、「起きて！」って呼んだら出てきてくれてました。それから二人で「ああ、どうしよう。これが地震というものか。」と言って震えてました。それから10分位して、下から火が出てきたんです。うちは上の方ですから、六甲道のあたりはよく見えるんです。御影の方かもしれないけど、煙がポーっと上がってきて、30分位で火災になりました。ガスがあるので火事は起きるかもしれないと思いましたけど、こんなにひどくなるとは思わなかったんです。すごく恐かったです。

後から考えたら、あの時まだ下敷きになってる人もたくさんいたのに知らなかったんですよね。近所が大丈夫で自分も大丈夫だから、きっとみんなも大丈夫じゃないかと。

(リ) 情報は入ってこないし。

——誰か言ってくれないと分からないものですよ。

——地震が起きた時、恐いと思いましたか。

(ソ) その時はいったい何が起きたかということ自体が分からないんです。

(リ) でも、ちゃんと台所のガス閉めなきゃって思いました。うちはガス漏れがひどかったんですよ。ガスの臭いかすると恐くなりますよね。でもあの時、ガス閉めたって思いこんで、一回、下に降りてまた上がってきたら、おもいきり開けっ放しでした。(笑) 反対でした。震えてて慌ててたし、暗くて何も見えなかったの。

——地震の時、リさんはどう行動したんですか。

(リ) 私も外へ出ようとしたんですけど、開けられないので、外から男の人に力一杯やってもらって開きました。

そして靴を探して外に出ました。それから妹の友達の所へ行って、小学校に避難したんです。

——ソンさんの家は韓国人の仲間が集まったって言う話ですけど。

(ソン)はい、そうなんです。7時頃に農学部卒業生が、韓国人の人ですけど、心配して訪ねてきてくれたんで

す。その人車を持っていたので、一緒に韓国人の仲間の安否を尋ねに行こうということになったんです。みんな、だいたい大丈夫だったんです。それから学校に行ったら、北の方に住んでる人も来てて、何人が集まったんですよね。午後になってから、水も出ないし、道路も混んでくるし、状況が悪化していくような気がして、とりあえずいったん帰って食糧を持ち寄ったんです。そこで、たまたま一番近いのが私の家だったんです。電気はあったからテレビも見れますので。ご飯を食べたりしながら、これからのことを相談しました。

最初は学校に泊まるつもりだったんですけど、水もタンクの水だけで次の日には無くなるかもしれないし、何より余震があったでしょう。たまたま北区に先輩の家があったので、5、6人でそこへ避難したんです。あっ、その前におもしろい話があったんです。東灘区に住んでる知り合いから電話があって、私が生きてるのが信じられないって言うんです。その人の周りの木造二階建ては全部1階がつぶれてしまってたんですよ。それで私は木造の1階に住んでるから、もう私はたぶん死んでる、絶対死んでるって思っていて、私が、大丈夫、ここは電気もあるのよ、と言ってもなんだか興奮してて信じてくれないんですよ。その人後から来たんですけど、状況を見てもまだ信じられないようで、妙なものを見るような目で私達を見ました。ほんとに大丈夫なの？ っていう感じで。

次の日また学校に戻ってきたんです。というのはまだ連絡がつかないひとが一人いたので。オウさんという法学部の人なんですけど。前の日に訪ねた時は、家はどこがどこか分からないくらい完全につぶれていて、その人はいなかったんですよ。そこにいた人に、怪我をしてどこかに行ったかもしれないと聞いたので、近くの病院をまわったんですけど、結局探し出せなくてその日は諦めたんです。次の日に、オウさんのバスポートとか荷物を少し取り出しておいた方がいいんじゃないかと思って、また来たんです。したら、そこにオウさんが現れたんです。避難所にいたらしくて、何も無いから服とか靴下とか取りに来たらしいんですよ。もう嬉しくて、抱き合って涙ぐんでしまいました。

その時に、オウさんと同じ下宿の1階に住んでいた人が何人が下敷きになって亡くなってたんですね。その中に留学生も一人いて、留学生だから誰も引き取り手がなくて、別の留学生二人に頼んで遺体だけ引き取ってもらったんです。

——実際に亡くなった人を見たんですか。

(ソン)はい、あれを見てからは、ああ、もう嫌だと思いました。オウさんを探して病院をまわってた時も何人か見ました。電気もなくて暗い所で、毛布だけ敷いて寝転がってるんで、見ていて恐くなったので、すぐ北へ引き上げたんです。北に避難して2、3日みんなと一緒に過ごしたんです。人数も増えて7、8人

くらいになったし、食糧もなくなってきたんです。

——あの時、物が無かったですね。

(ソソ)それで女の人は韓国に帰った方がいいのではないかという意見が出て。でも西宮北口までは歩くしか方法がなかったし、車は道が混んでいて動きませんので。そんな時、テレビを見て、関空まで船が出ることを知ったんです。

(リ)朝4時くらいに出ました。

(ソソ)車でメリケンパークまで行って、3、4時間くらい待って……

(リ) 9時半くらいに出発する船だったかな。

(ソソ)それが20日のことです。その時4人帰って、残った3、4人は在日の韓国人の人たちを手助けに行っていたようです。

(リ) 2週間くらい帰ってたんですけど、心配で仕方がなかったです。船で関空へ向かっているときもすごく辛かった。帰った方が安心かなと思って帰ったんですけど不安で……

(ソソ)両親も心配するし、他人の家にいるのも迷惑をかけるとその時は思ったんです。それで帰ったんですけど、でも情報はあまりないし、家がどうなったのかも、他の人がどうなったのかも分からないし……韓国で衛星放送を見てたんですけど、見ると余計に心配になるんです。ずっと神戸の長田区あたりを映してるんですよね。あれ見てもう大騒ぎ。

(リ) 実際周りは平気だったんですけど、ひどい画面だけが流れるんですよ。

——無事なところも知らせてほしいですね。

(ソソ)そうです。電話だけでは信じてくれないですよ。向こうの両親は。

(リ) みんながテント生活をして惨めな生活をおくっているように映ってるんです。

——リさんは小学校ではどうでしたか。

(リ)私は地震当日、午後2、3時くらいに家でみんなで寝てたんです。みんな疲れていたの。そしたら下方で避難する人が「早く出てこい! 5時からまた地震が来るぞ!」って叫ぶんです。びっくりして、みんなを起こしました。下でおじさんが大騒ぎしてるんです。余震がくるぞ、みんな避難しなきゃ、みんな出て来いって。みんな眠かったんですけど、避難したんです。

小学校へ行ったら、妹の友達もたくさん来たんです。でも周りを見たら老人と子どもたちばかりで、とても暗い雰囲気、こんな所に若い者がいてもいいんだろうかと思って、三宮に行ったんです。ひどい状態でした。電柱もビルも傾いて、歩くのも大変なんです。狭い道は瓦礫ばかりで、ほとんど山登りをしているような感じで、何回も転びそうになりました。

——三宮に行こうと思ったのは?

(リ) なんだかじっとしていられなくなって、見回りをした方がいいんじゃないかと思ったんです。小学校は暗い雰囲気だし、我慢ができなくなって……。寝るときだけ戻ってきたんですよ。

もらったカンパンおいしかったです。食糧のカンパンは大きくて真空パックになってるんですよね。賞味期限が平成11年までなんです。妹たちはけっこうおいしいと言って食べてたんですけど、お年寄りはお食べにくそうでした。

(ソ) あれすごく堅いんですよ。

(リ) その時はお茶もあまりないし、見てて可哀想でした。

(ソ) 地震の時って、水道は出ないし、飲み物が無いのに困りました。隣のお兄さんがジュースを1パックくれて、助かったんですよ。

——地震を経験して、何か良かったことはありましたか。

(リ) 顔も知らない人に助けてもらったり、お茶一杯で感動して涙ぐんだり、そういう話はたくさん聞きました。不満もありますけど、人に対する信頼感が確認できたと思います。

(ソ) 地震後、すぐに訪ねてくれた人はすごく印象に残るんです。こんな時こそ分かるそのひとの人間性を感じることができました。

(リ) それと、神戸に留学に来てホームシックで辛かった時もあったんですけど、故郷に帰るときに気が重かったのは、神戸がまた新しい故郷になっていたというのが分かったからなんです。

(ソ) それは私も感じました。

(リ) ああ、神戸のこと好きだったんだなあって。

(ソ) 離れたくないなあって。やっぱり住み慣れた場所なんです。

帰ってきて、もう勉強やめるといふことはないんですかとよく聞かれたんです。私達は勉強止める気は全然無いんですよ。どうしてそんなこと聞くのかなと思いました。

勉強に来たなら、悪い状況は乗り越えて行くしかないんですよ。それに、私達も一緒に住む所なんです。

外国人は簡単に出ていくと他の人は思ったのかもしれませんが。そうじゃなくて、私達と一緒に暮らしているんですよ。

(リ) 2年間の留学生活が積み重なって、こんなに私の心が影響されてとは思わなかった。

——今はこうして戻ってきて勉強を続けてるわけですね。

(リ) 勉強嫌なときもありますけど。

——(笑)

——これからがんばってくださいね。今日はありがとうございました。

[インタビュー]

金 哲松 中華人民共和国北京市出身。神戸大学大学院経済学研究科2年次在学中。神戸市灘区のアパートで被災。被災当時は妻と10歳の長男と同居していた。現在は、被災留学生に提供された甲南積の社員寮に住んでいる。長男は妻の両親の元に預け、妻は日本に呼び寄せた。1996年3月に大学院修士課程修了予定。その後は帰国し、中国の大学で教鞭を取る予定。

地震の前は1年くらい灘区の天城通りという所に住んでいたんです。嫁さんと子供を中国から呼んで来て一緒に暮らし始めてちょうど1カ月と4日目に地震があって、もう大変でした。木造の建物ですから、揺れるのはコンクリートよりはすごかったです。船に乗った感じですね。初めは夢みたいな感じではっきりとはわからなかったんですよ。でも子供が泣いていたので、これは大変だ、とすぐ目が覚めたんです。子供を連れて来て布団の下に入れて、そのうちに2回目の揺れが来て、ちょっと隙間みたいな感じで揺れが止まったんですよ。それからまた揺れが来て。そんな状態じゃどうしていいかわからないですよ。2回目が終わって、3回目がまた来て、どうしてあんなに長く感じられたのか不思議ですね。まだあるか、まだあるか、という感じですね。2回目が終わったときに、地震だということははっきり分かっていたから、どうして逃げようかということを考えていました。でも逃げようとしても動けない。それでもうちょっと我慢しようかと思って。ここは木造建物だから上から落ちて来るものがなければ生き残れると思ったんです。2階建ての建物の2階に住んでましたから、重いものは上にないですから。でも、電灯は落ちて来ましたね。テレビもめちゃくちゃになっちゃってね。3回目が終わってから、早く服を着て逃げようって妻と子供に言ったんですよ。真っ暗ですよ。電気も消えちゃってて、外もまだ暗かったし。窓はそのまま、ガラスが割れたりとかは全然なかったですね。でも窓を開けてみたら、周りの建物がなくなっちゃってたんですよ。どこへ行ったんだ、とか思って見ると、全部倒壊して2階の建物は一階が全部ないんですね。建物の高さが全部半分くらいになっちゃってて、これはすごいなあと思って。そのときは揺れはなかったんですね。とにかく逃げようかと思って。でも、階段はめちゃくちゃになっててね。一階にはおばあちゃんが住んでいたんですけど、幸い建物がちょっと傾いただけで。部屋の中に古い家具があったと思うんですよ。その家具はほとんど倒れてないんですよ。その古い家具が天井を支え

てて、だから僕は助かったんじゃないかと思うんですよ。僕の隣の建物は一階がぐちゃぐちゃになってましたからね。階段もおばあちゃんの家具があったから残っていたんだと思いますよ。外に出るときも一階のドアのガラスが全部割れちゃっててね、ドアもなかなか開かなかったですよ。外に出ても、どこに逃げたら良いかわからないですよ。ただ無意識的にこの家から離れなくてはならない、それだけですよね。幸い、みんな若い者ですから出たのは早かったですよ。僕ら3人が出たら、通りには1人のおじいさんみたいな人以外、誰も見えなかったですよ。みんな死んでしまったんだろうか、と僕は思いましたよ。隣をノックしてみたら、おばあちゃんは家具の下敷になって、なかなか出られない状態だったんです。おばあちゃんどうですか、と言ったら、ああ生きてるよ。早く出てください、と言ったら、重くて動けないよって。おばあちゃんの息子がそのときは来てて、どうしようかって言うから、どうしようもないですよ、早く逃げて下さいって言ったんですけど、1階だからドアが開かないんですよ。ガラスは割れてなかったんですけど、外に出られないでしょ。それで、僕は石を持ってガラスを割りますけどいいですか、と聞いて、割って、息子さんがまず出て様子見てから、また入っておばあちゃんを連れて出したんですよ。そしたら、また別の家から誰か呼ぶんですよ。みんな1階に降りたけどドアが開けられない。それでまたガラスを割って出してあげて。そのときは通りに5 - 6人いたかな。みんな隣の人はどうですかと聞くんですよ。死亡した人はいなかったですよ。全壊した家の中には人が住んでいなかったらしいですけどね。僕が住んでいた建物は戦前からの建物ですから、こういう状態じゃ余震が来なくてももうだめだろうと思って、家に入るのが怖くてね。でも、外で待つのは寒いでしょ。まだ朝早いんですからね。それで灘区役所に向かって歩いて行ったら、その辺りは僕の家より大変だった。火事があって、もうすごかった。灘区の近くの病院に入ったら、もっとすごかった。怪我した人がみんな横になってね。助けてくれて。ちょっと東に行ってみたら、また火事で何か爆発する音がして、そんな所で待っているのは大変だから、息子が通っている塵耶小学校に避難するのが一番いいと思って行ってみたんですよ。行ってみたらそのときは朝の9時か10時だったんですけど、避難していた人はまだ少なかったですよ。体育館が避難場所になっていて、3人で座って場所を確保したんですけど、そのまま座るのは寒くてね、毛布とか布団とかなかったの。それで僕は家に何か使えるものを探しに戻ったんです。家はいつ崩れてきてもおかしくはないと思ってたんですけど、見てみると隣の家との間にちょっと隙間があるんですよ。だいたい50センチくらいの。でも上を見るとくっついてるんですよ。むこうの建物がこっちに倒れて

きて、こっちの建物が向こうに倒れていて、うまく力と力が合わさっていてそれで助かったんですよ。もしそれが前に倒れてきていたら、もう大変なことになっていたでしょうね。でも幸いうまい具合に倒れて、それで助かったんですよ。それを見て、ああ今入っても危ないことはない、と思って、中に入って使えるものを探したんですよ。でも、ほとんどは使えなくなっちゃってて。それから4日間は、摩耶小学校に避難してたんですけどね、最初の2日間は何もなかったですよ。食べるものもおにぎりがちょっとしかない。神戸市からの救援物資ですけどね。どこにどれだけの人が避難しているのか神戸市側が分かっていなくて、どこにどれだけ持っていけばいいか分かっていなかったみたいでしたよ。物が無いわけじゃなくて、交通が不便で状況が把握できていない。2日目の夜から、おにぎりはお年寄りと子供しかもらえなくなったんですよ。家の中からパンとか果物とか持ってきていた人もいました。開いている店もありましたよ、店の中はぐちゃぐちゃでしたけど。それで少し助かりましたよ。僕らはパンとか何もなかったんですよ、お金はポケットの中にちょっと入っていて、もうそれだけだったんですよ。カードなんかあっても銀行がだめになっちゃってるし。それでジュースとか買ったけど、お水がないのが困りましたね、ジュースばかりでね、甘いものばかりで、それでおにぎりとかパンとかそういうものしかなくて、もういやになっちゃってね。それでも、3日目からはお弁当とか手に入ったんですけどね、救援物資が入ってきて。こういう状態で生活続けることは難しいなあと考えていたときに、僕が風邪をひきましてね。女房も子供も2人とも日本語そんなにできないから、何でも僕がしなきゃならないんですよ。自分の家にいたら、言葉通じなくてもお金出したらいるもの買って来られるんですけどね。避難場所というのはみんな言葉で確認しますからね。何かいりますかと聞かれても、女房には分かりませんからね。だから全部僕がやったんですよ。

隣の人が小さなテレビを持っていてね。西宮北口まで歩いて行って、そこから阪急に乗って大阪に行くとかやってね。知り合いが大阪にいたんですよ。最初は知り合いに頼ろうという考えはなかったんですよ。大変だけどね、我慢しようと思ってね。でも向こうの人は心配してたのね。その人はテレビ見て、神戸は大変や、とかで、もう金さんだめやわ、とか思ってたみたいで、2日連続電話やっても通じないし心配してたんですよ。毎日電話しても通じないので、お年寄りなんですけどバイクで豊中からここまでやってきてくれてね。ちょうど使えるものを探そうと家に帰っていた日に、一階が騒がしいので何やってるのかと思って降りてみたら、その人がいて、ああ金さん、生きてるのって。思わず泣きま

したよ。そこで僕は決めたんですよ、僕は風邪をひいているし、女房も子供も言葉ができないし、大阪へ行ってみようと。それで、僕はその人に中国行きの航空券を取っておいて下さいと頼んだんですよ。大阪まで行けば関西空港から中国に帰れますからね。地震から4日目の午後5時ぐらいでしたかね、家族3人で自転車を持って歩いて西宮北口に向かったんですよ。5時間かかりましたよ。子供がいましたからね。今の子供は音の子供と違って歩いたことなんかないですからね、ちょっと歩いたらしんどいしんどいと言ってね、ちょうど真ん中の芦屋ぐらいで子供が泣きましてね。でも、芦屋には知り合いもいないのですからね。辺りも真っ暗ですし、もう神戸には戻れないし、このまま西宮まで行くしかないですからね。泣くならお前はここに残れ、と言ったら、また泣きながら歩きましたけどね。西宮に着いたら、子供はああ電車が通じてると言って笑ってましたよ。向こうの家へ行ったら地震とか関係なくてゆっくりと眠れました。そこに2日間泊まって、22日の日曜日に関西空港から北京まで行く飛行機があって、それで帰ったんですよ。

それから1カ月後の2月の26日に僕は今度は一人で戻ってきたんですよ。大阪に一泊してから電車で西宮北口まで行くと、神戸から来るときに着る物とか荷物とかを積んできて乗り捨てておいた自転車がまだあったんですよ。その自転車に乗って神戸大学まで行ったんですよ、1時間30分くらいかかって。前の避難場所は避難している人が決まっていて、新しく入れない。ここの避難所に何人いるということが正確にわからないと救援物資を配ることができないですからね。大学に行ってみたら、ウーさんという人が学生青年センターにいるから探してみてくれ、と事務所の人に言われたんですよ。留学生センターに行ったらウーさんとちょうど出会って、それで学生青年センターの館長と会って頼んで、一か月ほどそこにいたんですよ。そこはもともと安く泊まれる合宿所みたいな所なんですよ。ちょうど地震のときが外国人の留学生の試験の時で、勉強できる場所が神戸にはなくて、館長が何とかしてあげなければならないと思って留学生を受け入れてくれたみたいですよ。そこで洪さんにも出会ったんです。(洪さんとは、神大大学院の中国人留学生)洪さんの奥さんは日本へ来て3日目に地震に遭ったんですよ。もう大変ですよ。奥さんはあまり日本語ができないんですよ。僕は住居の見通しがついてなかったのも女房に、我慢して下さい、住居の問題が解決できればすぐに電話しますから、と手紙を書きました。住む所を探していたら、元町の内外学生相談所で甲南漬の寮があると言われて。昔もここには神戸大学の留学生が住んでいて、僕らが入るときはちょうど卒業、就職、帰国とかで、都合良く空いたんですよ。甲南漬の会社が留学生に部屋を提供してくれて、会社側は条件は

いいことはないと言ってますけど、僕らにとってはいいですよ、特に家賃の面では。それで洪さんともう一人にこのことを話してすぐに決定して、中国人留学生3組でここに入ることになりました。実はみんなで六甲アイランドとかポートアイランドとかの仮設住宅を申し込んだんですけどね、やっぱりお年寄りとか体の不自由な方とか小さな子供がいっぱいいる人とかが優先されますからね。当たり前でしょうね、僕らは健康でまだ若いですから。本当に仮設住宅なんて当たらないですよ。ちょうどその時期にここを紹介してもらって、本当にうれしかったですよ。大学も甲南積の会社も学生センターも本当によく協力してくれてね。甲南積の専務の人はほとんど毎日ここへ来て、どうですか、と声をかけてくれますしね。ありがたいと思ってます。

僕にとっては大きい地震はこれが初めてですよ。初めてということではみんな同じだと思いますけど、ああもうこれで国にも帰れない、とか思いましたね。せっかく地震がないと思って関西を選んだのに、もうこれで終わりや、とか思いましたね。知り合いが東大を紹介してくれまして、東京に行くかもしれなかったんですけど、東京はあまり好きにはなれないですね。関西のほうが東京より暖かい人が多いし。でもここで地震が起こるとは夢にも思いませんでしたよ。みんな同じなんでしょうね。80才くらいのおじいさんに聞いても、こんな地震初めて経験した、とか言ってますから。最初はいろんなことを考えましたけどね、慣れてくると、みんなで助け合って援助ももらえて、ああよかったかなあって思うこともありますね。

やっぱり日本に留学する場合は、地震がなくても住居の問題がいちばん厳しいですね。中国から来た学生は学費とか払うためにみんなアルバイトしてますから、家賃にあんまりお金をかけられないんです。だからどうしても安いところに住む。この地震で中国人留学生に多くの死者が出た理由も、一つはそれだと思うんですよ。みんな木造の安いすぐ潰れるようなところに住んでたんですからね。一階に住んでた人はほとんど死んでるんですよ。助かったのは2階に住んでた人ですから。地震の前でも住むところを探すのは大変だったのに、今はもっと大変ですよ。だから日本人学生でも経済的に貧しくて勉強するにも余裕がない学生とか、留学生の場合はほとんどお金ないですから、自分でアルバイトして生活してますから、そういうお金に困っている人間のためにも、もうちょっと寮とか作って欲しいと思いますけどね。そうしたらアルバイトの時間をちょっと減らして勉強できますしね。留学生のほとんどは奨学金とかもらってないですから、アルバイトをするとその分勉強ができなくなるし大変ですよ。食べるものも食べられなくなってしまう。僕もそうだった

たんですけどね、ラーメンばかりでしょ。だからできるだけ安いところを探すんですけどね。地震がなかったらまだよかったんですけど、地震の後はまだ大変ですよ。国立大学だったら、もうちょっと寮の部屋の数を増やして欲しいですね。勉強したくて苦しい生活を続けている人も多いんですから。

今回の地震で、大変な時にこそ人間のいい所が復活するということを感じました。甲南漬の会社の人たちのように、言葉が不自由で親戚もお金もない自分たち留学生を助けようとしてくれた日本人もいっぱいいましたし、困った時にはお互いに助け合おうという人間としてのいちばんいい所を見たような気がします。避難所に避難していた人たちは、みんな家をなくした人たちです。自分の家がなくなってしまったんだから、僕ら留学生よりもっとひどい状態だと思います。そんな中で、みんなどうですか、大丈夫ですかとお互いに声をかけあっていました。そういう言葉をかけあうことの暖かさを強く感じました。日本人でも中国人でも同じ人間であって、区別はないということを初めて感じました。お金じゃなくても、親切だとか、ひとことでもやさしい言葉をかけてくれたら、それだけでも助かりますから。格差がなくなってみんな平等になってしまったら、本当に一人の人間として自分のことを話せる暖かい雰囲気が生まれます。普段はお金があったり地位があったりして、人と人との間に格差がありますから、どこか人に対して冷たくなってしまったり、あんまり自分の悩みを人に話したりする人がいませんし、そういう雰囲気がありません。でも地震でお金も地位もなくなってしまったときに、みんな本当の人間になってお互いに助け合える暖かい雰囲気が生まれてきたと思います。この地震の記憶も、そのうち薄らいでいくことでしょう。でもこういう経験があるのとないのとでは、その人のこれからの人生は変わってくると思います。こういう経験があれば、他人が困っている時にはやさしい言葉をかけ、暖かい手をさしのべることができるんじゃないかと思います。この地震を通して、家はなくなったけれど、他人のために何かをするということと、人間に何が必要かということを勉強したように思います。

(1995年5月5日に金さんの自宅、神戸市の甲南漬の社員寮でインタビューしたもの

をまとめました。

記:片山弘倫)

[インタビュー]

エイ ティン ライン ミャンマー出身. 神戸大学文学研究科(被災時は同研科研究生).
東灘区御影の7階建アパートの1階で被災, 隣室の同国の友人
キン ティ スエさんとウェイ モウ ルインさんを亡くす.
エイさんは右腕を複雑骨折, 奇跡的に助かる.

1.17 恐怖の瞬間

<地震のあの瞬間, エイさんはどうしていたんですか?>

そうですね. 今は何とか話せるようになって来たんですよ. 17日の朝は, 6時10分前に目がさめて, 立ち上がる瞬間に地震があったんですよ.

<地震だって, すぐに分かりましたか?>

何だろう. 最初は地震ということが分からなかった. 何というか, 「死にたくない!」と日本語で言ったんですよ. 瞬間に, 頭の中に「死」という言葉がちゃんと入ってましたね. 炬燵で寝ていたんですが, 天井の真ん中には電気がありますね. 電気のところから引っ張られた感じで, 全部, こういうVって形でね, 落ちてきたんです. それが, 瞬間に見えたり, 後ろの本棚が落ちてきた瞬間も見えて, もう周りから押されたという感じ. そういうことになって, 手が何も感じられなくなりましたね. 頭は下を向いたまま, 手はどこへいっちゃったか分からない. 痛いという最初の感じの後は何も分からない. 「親の先には死にたくない!」ということも頭の中にありましたね. 真っ暗になっても, ちゃんと意識がありますから, 全部覚えていますよ. コンピュータが落ちたということも分かってました. 額が切れたようで, 熱い感じの血がたくさん出てきました, 頭の中と後ろからもね. それから, 何時間たったか分からなかった. 外から, 「キンさんルインさん, エイさん--」と呼んでいる声がきこえたの. 返事したけど, 分からなかったみたい.

その後, どのくらいかかったか分からない. 真っ暗で何がなんだか分からない状態で, 最初は涙が出てきた. 泣いたら, 血がたくさん出てきたから「泣いたら, ダメダメ!」と自分で言ってね. お経だけ詠んでました. 怖いことに会っても, それが夢の中なのか, 本当に自分がそういう状態になっているのか, 最初わからなかった.

それから, 自分はいくら呼んでも(外に)聞こえないから, そばにある化粧品とか, 足で蹴って音を出したの. そしたら, 「ここは誰の部屋?何か音, 出してる」といって, 掘ってくれたんです. 中は空気も悪く, すごく苦しかったんですが, 新しい空気が入ってきて, ちょっとほっとして, 「出れる」と思ったの. (外から)「足, 引っ張るわ」といったので, 「引っ張ったら死ぬ!」と言ったんですよ. そしたら, 「炬燵出すわ」と言ったので, 「炬燵, 先に出したら死ぬ」と言った. 頭から血が出ているし, 本棚が落ちているからね, 誰もあの時間に(崩れ

たアパートの中に)入りたくないよね,余震もあるし...,どうしよう...と,みんな困ってました.

結局,体の一番小さい山田さんという人が入ってくれて,ふとんの上に乗せてもらって,鉄筋と鉄筋の間のところから外に出してもらいました.

「生きている」ということ

(大学院の入学試験のあった)2月13日の夕方,自分のマンションを見にいったんですよ.それを見て,生きていることが信じられなかったんですよ.「私は死んだ」といっても,不思議なことはまったくない.だから,不思議な気持ち,心の中にたくさん,あるんです.(1月)20日に加古川の病院に着いて,21日の朝,起きた時,すっごく,言いたかったの.窓から見た加古川の景色がすごくきれいだったんです.すっごく,きれいな.もう,ああ,今,生きているから,こういう景色が見られるんだ.お日様が出てね,山があって,工場とか見えて,ほんと,ジーンとなってしまったんですよ.看護婦さんが入ってきて「エイさん何してんの?」って.「加古川ってきれいなえ」って言ったら,「別に何もきれいな景色じゃないよ」って.でも,私の中ではとってもきれいな景色なんです,とっても.それで,「ほんとに私生きてるの?」と頭の中で自分に何べんも聞いているの.「めちゃくちゃ,きれいやわあ」とか言って,みんなに笑われました.そうそう,私が埋まったままで7時間した後,出られた時も,外の空気が凄くきれいだったの.もう,何というか,上手に説明できないけど....

<それが,生きている証なのね>

そうですね...・

たくさんの温かい心

<エイさんは,ほんとうにいろいろな人にお世話になったようね>

ええ,ほんとに.手術は23日だったんですが,(ホストファミリーの)宝塚のお母さんやお父さん,それから大阪のお母さんも,みんなすごく心配してくれてね.手術の日も外で待つ,と言ってくださったんですよ.でも,みんなの家の中もぐちゃぐちゃになっていて,ひどいし,電車もなくて,みんなも困っているということが分かってたから,手術は自分一人で受けられるし,大きい病院で,お医者さんも看護婦さんもいるから大丈夫と言ったんです.大阪のお母さんは働いているから,毎週,日曜日に来てくれたんですが,話すのは1時間ぐらいで,往復に,その時は,10時間ぐらいかかったんですよ.(大阪のお母さんは)ビルマのほうに何回も行ってたんですよ.ホストファミリーの人も宅急便で何回も食べ物を送ってくださったんです.それから,大学の先生もみんな,大学院の入学試験のことを心配してくださってね.それだから,もっとね,がんばりたいという気持ちも目的もあるんですよ.することはしなきゃね,もう戦いですよね.

入学試験の日,当日に加古川から来ようとしたら,非常に困るんですよ,時間がかかって.で,友達のご夫婦をお願いして,前の日に迎えに来てもらって,泊めてもらったんですよ.あっ,そう!話変わるけど,労災病院にいる時,吐き気止めとか痛み止めとかして,もうどうしようもなくひどい状態の時,何も食べられなかった時

に、友達の奥さんが温かいおのこぎりをもってきてくれたの。懐炉で包んで温めて持ってきてくれてね、バイクで来てくれてね。その時は食べ物も全然食べられない状態だったけど、その状態で初めての一番おいしかったお握り。非常においしい。いくら費沢なものを食べたとしても、もうこんなおいしいお握りは無い。それぐらいおいしい!! おいしい!! 一生忘れられないお握りだった。

病院の先生もりハビリの先生も、もう、みんなみんな非常に面倒をみてくれた。リハビリしたらすごく痛くて涙が出るけど、頑張って元通りにならないと、先生も一生懸命してくださったのに、失礼ですね。

地震の仏像

それから、手術する前の日の晩、全然知らない人が「あなたには、こういうものが要と思うから...」と言って、ビルマで一番有名な仏教遺跡の仏像の写真を持ってきてくださったの。手術の前の日だから、ちょうど部屋の中にいて、お教だけ詠んでいたの。その時は、想像してお教を詠んでいたんですけど、まあ、それを見たら、不思議なんですよ。仏像が手をこういう形で、何か止めてくれると言うか、プロテクトするような仏像だった。12年前か15年ぐらい前だと思うんですけど、ビルマでひどい地震があったんですよ。その時、ヤンゴンの隣の町の遺跡や仏像が倒れたの。そこには、何百年も前の仏像があるのね。その時、一生、開けてはいけなと決まっている所の鍵が自然に開いたの。向こうは、地震の仏像なら地震で外に出られる仏像があるんです。私も地震で出てきた仏像を持っているんですけど、(地震で)7時間埋められていた時にも、頭の中にその仏像が出てきたの。それで、無意識にお教を詠んでたの。集中して、何回も詠んでたら、頭のここの所(額のあたり)に仏像が見えてくるんですよ。それで、私、悪いことは何もやってなかったけど、無意識にやってたとしたら、人間だから、もう完璧じゃないから、それだったら許してください、と何回も何回も謝ったのね。

向こうはね、小乗仏教で、仏様とお教とお坊さん、それから、何回も先生になった人と親、その5つは大事なもののだから、それに対して、私はどういう悪いことをやったか、考えるのね、埋まったままで。そして、許して、許して、とか言ってね、もう今回だけでこういうひどいことは止めて欲しいって何度も言って、謝ってたんですよ。結局、私は助けていただいたんですが... 。

このインタビューは、彼女が話したうちのほんの一部であるが、このようにして、エイさんは奇跡的に助かった。しかし、キンさん、ルインさんへの後悔の気持ちは非常に大きい。彼女たちへの気持ちは「先に逝った二人へ」に凝縮されているので、このインタビューの内容からは割愛させていただいている。インタビューの最後は、「今は母には会いたいけど、修士が終わってからね。それと、今年から奨学金ももらえるようになったし、先生たちもいっぱいいらっしゃるし、いつもいい先生はっかりだから、良かった」という言葉で終わっている。